

大山町教育審議会第2次答申（概要）について

1 答申日 平成20年11月27日（木）

2 諮問事項 「大山地区の小学校のあり方について」

3 小学校の適正規模を検討する上での基本認識

※数字は在籍児童数（見込含む）

（平成20年5月1日現在）

	6年	5年	4年	3年	2年	1年	6歳	5歳	4歳	3歳	2歳	1歳
大山西小学校	37	29	33	35	35	46	41	46	31	26	45	23
大山小学校	16	16	6	12	15	20	13	17	15	13	13	15
赤松分校	5	2	2	3	2	4	4	2	2	1	7	2
計	58	47	41	50	52	70	58	65	48	40	65	40

- (1) 小規模校であると、学校全体が落ち着いた雰囲気となるが、学校行事等は低調になりやすい。
- (2) 小規模校であると、全校児童による一斉活動は行いやすく、地域行事などへの参加がしやすい。
- (3) 小規模校であると、同学年の児童同士の関わり合いが設定しにくい反面、異学年児童による縦割り活動が中心となり、上級生が下級生を指導する場面が多くなるなど、上級生としての自覚が育ちやすい。
- (4) 1学級の児童数が少人数であると、担任の目が一人一人の児童に行き届き、個に応じた学習指導などきめ細かな指導が行いやすくなる。反面、さまざまな意見や考え方を参考に自分の考え方を深める学習場面は設定しにくくなる。
- (5) 複数学級の場合は、児童を中心とする学校行事において、学級集団同士の磨き合いが可能となり、学級内の児童同士が目標に向けて力を合わせてひとつのことを成し遂げる経験を設定しやすい。
- (6) 複数学級の場合は、クラス替えを行うことができ、児童間、児童と教師との新たな人間関係づくりの場面が設定され、人間関係の固定化を防ぐことができる。
- (7) 教員の配置について、学校全体の学級数に応じて配置数が決定されるため、小規模校にあっては、教員同士の学び合いや切磋琢磨する機会が少なくなる。

- (8) 複式学級については、一人の授業者が2つの学年を同時に指導に当たるため、教師の高い指導力が求められる。児童の発達段階や指導内容を考慮すると、複式学級は解消するのが望ましい。
- (9) 小学校の教育活動は地域とのつながりが深く、地域に出かけて活動をしたり、地域の人材を招いて活動をしたりする場面が多く、生活基盤である身近な地域に学校がある方が好ましい。
- (10) 小学校は、原則的には学級担任が授業者であるため、中学校のように児童数や学級数の減少に伴って非常勤講師や他校との兼務者が増えることはない。

4. 審議のまとめ

(1) 大山小、大山西小について

小学校にあつては複数学級が望ましいが、ある一定以上の児童数が確保されるなら、その地域や学校の特性を生かした教育活動が可能である。児童数は現状維持で推移する見通しである上、地域の人的・物的な資源を十分生かした活動が積極的に展開されており、現時点では、大山小学校、大山西小学校は、当面、現状のとおりとするのが適当である。

(2) 赤松分校について

赤松分校については、1学年1人、2人という学年が相当数あり、複式学級である現状を考慮する必要がある。交流活動、縦割り活動は評価できるが、同年齢の児童の人間関係づくりの場として不十分である。学校施設も十分ではないため、交通手段の確保が十分に保障される現在にあつては、分校を廃止し本校に統合することが適当である。

(3) 見直しの必要性

今後、現在予測できない状況（児童数の減少など）が生じる場合は、大山小学校、大山西小学校の2小学校を1校に統合することも視野に、適切な時期に再度、小学校のあり方についての検討が必要である。

(4) 配慮すべき事項

小学校は、長年、地域と非常に強い結びつきをもって学校運営がなされ、地域の文化・コミュニティーの拠点としての役割も担ってきた。これまで学校が地域で果たしてきた役割や意義、地域住民の感情等にも十分配慮することが必要である。また、本校へ通学することに伴う新しい仲間づくりへの不安の払拭、スクールバスによる通学面への配慮等を十分に行うこと。

5. おわりに

これらの方策を講じていくにあたっては、児童・保護者の通学面等への不

安や負担が生じないよう万全な対応を図ること、地域住民に趣旨を十分に説明し理解を得るよう努めることが重要である。また、地域住民はもとより全町民の理解を十分に得られるよう留意すること。財政状況の厳しい中ではあるが、学校は大山町を担う子どもたちを育てる場であり、学舎としてふさわしい教育環境が整備されるよう一層努めることを切に希望する。